

# 本を選ぶ

NO.400 2018年(平成30年)9月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>アカンサス

●紙魚の繰り言 第21回

●デニーズから世界へ

●図書館を離れて(第42回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## アカンサス

庭の端っこのシラカシが隣家の塀を越えてしまい、手入れが必要になった。手許の植物図鑑をのぞいてみる。放っておくと下枝がなくなり上ばかりが繁る、とある。まさにこれだ。

眺めているうちに、ふたつに分かれた太い枝を間引いて、道具に使えないかと思いつく。なにしろ檜げんのうの木だ。かねてより玄翁の柄を自前ですげてみたいとたくらんでいた。檜は堅くて丈夫だから昔から道具の一部に用いられてきた。だが、伐ったばかりの生木はすぐには使えない。1年は寝かせて水分を抜かなくてはならない。

待てよ、生木でもグリーンウッドワークなら待たずともできる、とひらめいた。

グリーンウッドワークとは、要するに生木を使ってちょっとした椅子や小物などにする実用の木工だ。身近な庭木や雑木林で出る太い枝とか間伐材のような素朴な材料を使う。まだ柔らかい生木のまま、いずれ乾燥して締まる木の性質を利用してこしらえる。十分に乾燥させた広葉樹を製材してきちんと制作する家具とは違った味わいがある。

有名な例として「ゴッホの椅子」が知られている。フィンセント・ファン・ゴッホが「アルルの寝室」や「ゴッホの椅子」で描いたあの素朴な

椅子だ。部材が無骨に削り出されしかも不揃いで、座面も高価な布や革張りではなく、麦藁か葦を編みただけの実に素っ気ない田舎づくり。ゴッホが描いたもうひとつの「ゴーギャンの肘掛け椅子」は、対照的にそれなりの家具材を用いて優美な曲線を多用し、肘掛けや立派な布張りの座面というつくりからしても、立派な家具だ。

「ゴッホの椅子」は人間国宝の工芸家、黒田辰秋が偏愛した椅子であり、民藝運動を担った面々も讃えた椅子でもある。『ゴッホの椅子』(久津輪雅著/誠文堂新光社/2016)は、日本に初めてこの椅子をもたらしたのは黒田ではなく、もとはと言えば陶芸家の濱田庄司だと伝える。さらにウィンザーチェアを始め、西洋の様々な椅子を日本に紹介したという。精緻な工芸作品を生み出した木工家の黒田と、素朴な1脚の椅子との関わりからこんなふうに語られる物語は、後半で紹介されるグリーンウッドワークの実際ともども興味深い。

シラカシの根本の先に目をやると、ギザギザの葉っぱがよっきりと出ている。しかもかなり大ぶりで特徴的な形状の葉が2枚、どこかで見たような見ないような。庭師曰く、アカンサス・モリスのようですね、と。現行の1万円札にもあしらわれている植物のモチーフにも似た、いわゆる唐草文様で使われる植物だ。かのウィリアム・モリスが描いた唐草のデザインでは「シスル(アザミ)」という名がついていたと思う。確かにアザミに似てはいるものの、植物図鑑によればアカンサスはアザミの仲間ではないそうだ。(埜村 太郎)

## 世界の昔話の類型

大食いネコ系列の昔話はどれぐらい世界中に分布しているのでしょうか？『国際昔話話型カタログ—分類と文献目録』（ハンス＝イェルク・ウター／小澤昔ばなし研究所／2016）で調べてみます。このパターンの話はアールネとトンプソンのカタログのジャンル分けに基づき、動物昔話、魔法昔話等の一つ、「形式譚」の中の「累積譚」の「食べることを含む連鎖」に分類されています。さらに、その「連鎖」の中の「すべてを呑み込む動物が腹を切り開かれる」という話型として、位置付けられています。

説明を引用すると、「たいへんな食欲の猫が、大量のミルクを飲み、それから大量の食べ物を食べ、いっしょに暮らしている家族を呑み込む。猫は出掛け、路上で会った人々から、なぜそんなに太っているかと尋ねられる。猫は自分が食べたものすべてのものを挙げ、その人のことも食べると告げる」（中略）「最後に、破裂するか、または雄牛に出会い、雄牛を食べようとする、雄牛が角で猫の腹を裂いて開く、猫が食べたものが皆生きてまま出てくる」という次第です。

つまり、①主人公（？）が大食いで、出会ったものを片端から飲み込んでしまう、②出会った時に、腹がふくれた理由を滔々と唱えるように告げる、③主人公は腹を切り裂かれて、飲み込まれたものは無事に助け出される、という3点が話の核になります。

世界中の類話では、ネコ以外にオオカミ、トロール、ハツカネズミ、巨人、クマ、ヒヨコ、カボチャ、女、シラミ等が、飲み込み役をになっています。この他に、ひょうたんや泥人形があり、腹を切り裂くのもヤギ、トナカイ、シカ、ウシ等がいるわけですから、組み合わせの違いもあると考えると、実に多彩です。オオカミやトロールは飲み込む存在としては納得できますが、シラミとなると、飲み込む方も大変そうです。ただ、巨大化したシラミと

いうのは想像したくはないですが。

そうすると、ネコの食べっぷりや多産であることから、この話型の昔話が発想されたという推測は成り立ちそうにもありません（全ての昔話が同じ起源である場合の話で、地域によってはネコに由来するかもしれませんが）。だいたい、カボチャが飲み込むなんていうことは普通はありえないですから、起源は謎です。

どこの民族の昔話なのか確認すると、エストニア；ラトヴィア；ラップ、ヴェプス、カレリア、コミ；スウェーデン；ノルウェー；デンマーク；アイスランド；アイルランド；イギリス；スペイン；カタロニア；ドイツ；イタリア；ハンガリー；チェコ；スロバキア；ギリシャ；ロシア；ジプシー；アブハズ；モルドヴィア；シベリア；ウズベク；グルジア；パレスチナ；カタール；イラン；インド；中国；スペイン系アメリカ；アメリカ；アフリカ系アメリカ；ナイジェリア等という具合で、北の方の国が多い傾向はあるようですが、広範囲に存在しています。

これだけ、世界中に類話があるとなると、共通する何かがあるのでしょうか？ あらためて、この話型はどういう経緯で生まれたのか、不思議に思います。

## しょうがパンぼうやは逃げる

実は、『国際昔話話型カタログ』では、食べることを含む連鎖の項目中には、もう一つ「逃げるパンケーキ」という話型が紹介されています。あの『おだんごばん』（脇田和絵・瀬田貞二訳／福音館書店／1966）のパターンの話です。パンケーキ（その他、プリン、ケーキ、クッキー等）が食べようとしている人から逃げ出し、様々な動物に会うのですが、そのいずれからも逃げ出し、そのことを自慢げに語り、最後は食べられてしまうという話です。最後に食べ損なうのと食べられてしまうのとの違いはあるのですが、出会うたびに自分が食べたもの

(あるいは逃げ出したもの)について、歌を歌うようにいちいち繰り返すところが似ているのです。

そう考えていくと、マザーグースにある『おばあさんとぶた』の話も似た構造を持っています。おばあさんがブタに柵を飛び越えさせるために、次々と頼みごとを繰り返していくところです。『国際昔話話型カタログ』では、「食べることを含む連鎖」の次に、「その他の出来事を含む連鎖」の初めの話型として、「お婆さんと彼女の豚」の話型が取り上げられています。

これはいわゆる積み上げ歌の一種です。たとえば、「これはジャックのたてたいえ」などが、その代表だと思えます。中でも、マザーグースの「クリスマスの12日」の歌の歌詞が、大食いネコの自慢話(?)に似ている気がしています。

つまり、クリスマス1日目の贈り物が1羽のヤマウズラに始まり、2日目は2羽のキジバト、1羽のヤマウズラと続きます。そして、「さあ クリスマス このかめのおくりものは 9にんのげんきな ドラマー (以下、繰り返し)」「わしづなつえ訳/エミリー・ボーラム絵『クリスマスの12にち』/福音館書店/1999)という具合に、特徴のある人の一団が飲み込まれるところが、似てゐるのではないのでしょうか。

しかし、似てゐるのは、先にあげた3点の特徴のうち、2点目のところであって、大食いであることと、腹を切り開かれて出てくるという点は似ていません。その点で似てゐるのは、やはり「オオカミと七ひきのこやぎ」なのです。『国際昔話話型カタログ』でも、大食いネコの話型から「オオカミと七ひきのこやぎ」の話型に参照の指示が入っています。

### ヒヨコが主人公

大食いネコの昔話の類話というほど似てはいないのですが、気になる話が、水谷章三文、いとうひろし絵『かたあしのひよこ』(ほるぷ出版/1992)です。スペインの昔話です。王様に片足をとられた金の足のヒヨコが、足を取り戻しに行く

という話です。途中、「さるかにがっせん」のように、援助者が現れるのですが、いずれの援助者も歩くのに疲れて、ヒヨコが飲み込んで連れていくこととなります。オオカミ、ライオン、川を連れて王様のところに着いたヒヨコは、援助者を吐き出して、その力を借りて窮地を脱し(よくあるパターンですね)、足を取り戻します。この話では、飲み込むのは食べるためではなく、生きてまま運ぶためということになっていますし、腹を切り裂かれて、ひどい目にあうということもありますが、通常とは言えない飲み込む力という点で、大食いネコの系列の話に近いのではないのでしょうか？

ただし、この話はかなりバリエーションがあって、「小さな半分のおんどり」では(フランスの昔話/山口智子編・訳『なぞとき名人のお姫さま』福音館書店/1995)、半分の卵から生れた半分のおんどりが援助者をお尻に入れて金貨を取りかえしにいくという話になっています。オオカミ、キツネ、ヴィエヌヌ河、モンスズメバチを連れて。

また、「はんぺらひよこ」では(スペインの昔話/瀬田貞二訳『世界のむかし話』/学習研究社/1971)王様のところには行くのですが、途中で会う援助者を全部断ってしまいます。結果は哀れなことになるのですが。

類話を比較してみると、大食いネコ系列の話は、何でも飲み込まれてしまうスケール感の大きさが面白さの第一なのではないのでしょうか？

### 大食いの意味

我が家のネコの食べっぷりを見てみると、朝食は6時ぐらいなのですが、ものすごい勢いで、食べています。まるで、何日か絶食させていたのではないかと勘違いしそうなほど、勢いがあります。それでいて、2回ぐらいに分けて食べる傾向が出てきました。一度ある程度食べてから横になって休んで、少し腹をこなしてから、また食べる時がよくあります。(さかべ たけし)



# デニーズから世界へ 一時空を超えて旅する絵本



西山 雅子

重たい仕事はデニーズで詰めるに限る。ドリンクバーを注文し、がんばる自分を応援するべくふだん食べないお肉やパフェも解禁する。その日は4時間ほどである程度仕事の目処もつき、ご褒美にビールまで飲んでレジに向かった。ところが、ガーン！財布がない。お金を持ってきてくれる人がいないなら即、警察を呼ぶという。保険証や運転免許書を預けても払いに来ない人は来ないんだそう。「初警察沙汰かあ…」しかも、ファミレスで無銭飲食って。思わずブツと吹き出す不届きな私を、なぜか信用して帰してくれた、その道30年の店長さんに飲食代とともに一冊の絵本を届けることにした。

「実は、デニーズで生まれた絵本なんですよ」

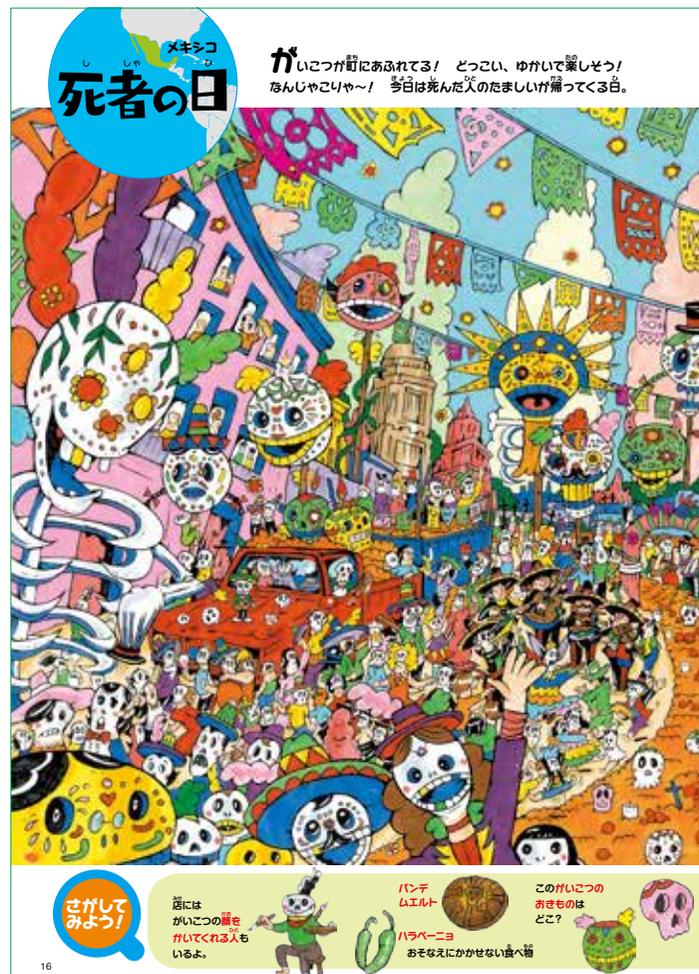
タイトルは『さがして みつけて なんじゃこりゃ！ まつり』。絵は中垣ゆたかさん、私が文を書いている。ブラジル・リオのカーニバル、ベルギー・ねこ祭りなど有名な祭りから、イギリス・チーズ転がし祭り、アフリカ・マリで60年に一度のシギの祭りといったローカルなものまで、世界のびっくり仰天な11か国の祭りを探し絵を楽しみながら旅する絵本だ。ページを開けば、どこもかしこも人、人、人の大賑わい。緻密な群集イラストが持ち味の中垣さんならではの企画である。じっくり見ると祭りを象徴するアイテム、それぞれの国のスポーツや楽器、お土産、食べ物などが細かく描き込まれている。隅々までよく目を凝らして、ひとつひとつ見つけていくうちに地理や異文化理解にもつながるという、調子のいいタイトルとは別に、とても真面目な狙いがある。

ありそうでなかった実際の祭りを下敷きにした絵探しの絵本。企画はすんなり通ったものの、手をつけてからありそうでなかった理由が明らかに。まず祭りと一口に言っても、歴史や規模、目的や地域も実にさまざま。どんな基準で11か国をセレクトするのか。しかも祭りは生きている。伝統的な祭りでも衣装や催しの内容など年を経るごとに変遷していく。そのため、たくさんの資料写真の中か

らどこを絵におこすのか、何を探してもらうのか、監修に祭り写真家の芳賀日向先生をお迎えし、知れば知るほど奥が深すぎて迷う、迷う、迷う……。

町田のデニーズで中垣・西山のふたりで始まったぐるぐる終わらない話し合いは、いつしか「もう待てません」と出版社の担当編集Sも参戦、一番ピークの2か月ほどは3人で毎週毎週、だいたいいつも6、7時間以上デニーズに詰めるという、まさしくお祭り騒ぎであった。よせばいいのに盛り込んだ絵探しの数は本全体で460か所。どうりで校正が終わらないはずだ……。

最終的に選んだ祭りの基準はずばり「なんじゃこりゃ！」という驚き。加えて絵本にしたときのおもしろさ。ただ人が多くだけでなく絵的な動きが出せ



メキシコ  
死者の日

がいこつが町にあふれてる！ どっかい、ゆかいで楽しそう！  
なんじゃこりゃ〜！ 今日は死んだ人のたましいが帰ってくる日。

さがして  
みよう！

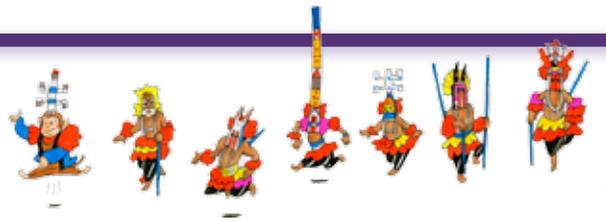
店には  
がいこつのおも  
かいてくれる人も  
いるよ。



パンチ  
ムエルト  
ハラペーニョ  
おそえなにかかせない食べ替

このがいこつ  
のおきものは  
どこ？





るかどうか。さらに原始的祝祭、宗教由来、年中行事、地域おこしなど、祭りのタイプに多様性をもたせ、開催地域もなるべく偏らないようにした。

全体の絵は新聞やニュースに出てきそうな、これぞ、という瞬間をとらえた祭りの風景。とはいえ実際の祭りは数日間に渡って行われたり、一日のうちでもさまざまな催しがあったりする。そこに流れる「祭りの時間」をどう一枚の絵におさめるのか。起源や由来、歴史をふまえると、さらに長い時間が流れている。かくして、いかにもありそうな祭りの風景は、伝説の人物や神様までもが隠れていたり、なんじゃこりゃ！な見どころでいっぱい。ありえない光景へと変貌し、現地を訪れたようなリアリティを感じながら、いつのまにか時空を超えて旅をする

絵本に仕上がった。祭りの醍醐味が「ハレとケ」の「ハレ」にあたる非日常体験だとしたら、この絵本でしか味わえない「ハレ」の日を存分に満喫してほしい。

さて、店長のご厚意で八王子のデニーズ店頭に飾られることになった本書、なかなか子どもたちには好評のよう。本屋さんではン百万部超えの海外翻訳ものの探し絵本シリーズの間に埋もれ、その名のとおり「さがしてみつけて」な状態であるが、この春の発売からはじまったワークショップやトークイベントなど中垣・西山・担当編集Sによる歌って笑って終わらないお祭り騒ぎは今も続いている。見かけたらぜひ、ご声援を！

(にしやま まさこ:フリー編集者)

にぎやかな祭りつけや、おどろきのものでおかしな。死者のたましいといっしょに歌って、おどって、笑ってすごす。死を懸つて、生きる力をもらうんだ。



ハッピガいたすらしてる！どこかな？

おみやげはこれ！



がいこつ キヤンドル



ハバヒヒコト (3)



マリアップチ 人形

お祭りかすいたらこれ！



タコス (2)



タマル メキシコのちまき



ホットチョコレート

マリゴールドの花は死者のための通るへ。この花のじゅうじかはどこ？

ようきなえんそうのマリアッチ

このパンフレットはどこ？ (5)

『さがしてみつけてなんじゃこりゃ！まつり』  
文/西山雅子 絵/中垣ゆたか  
監修/芳賀日向  
定価: 本体1,400円+税  
ISBN 978-4-86549-134-0



■お知らせ■

中垣ゆたか

『なんじゃこりゃ！まつり』絵本原画ミニ展示

日時: 2018年10月23日(火)～11月4日(日)

9時～22時まで \*10月29日(月)は休館

会場: 町田市民文学館ことばらんど1F文学サロン

(町田市原田4-16-17) ☎042-739-3420

\*関連イベント\*

「なんじゃこりゃ！

世界をめぐる探し絵クイズでおまつりさわぎ！」

日時: 2018年10月28日(日)15時～16時

講師: 中垣ゆたか(絵本作家)、西山雅子(編集者)

対象: 3歳～小学生

定員: 20名(申込順) 保護者の見学可 当日席10席あり

会場: 町田市民文学館2階大会議室

申込: 9月21日(金)正午から文学館に電話

☎042-739-3420

浜松ハロウィンフェスティバル～絵本のまち2018～

中垣ゆたか むりえワークショップ

「なんじゃこりゃ！ハロウィン」

日時: 2018年10月27日(土)12時～13時

会場: 遠鉄百貨店1階広場(ソラモ) 参加費: 無料

## 図書館を離れて (第42回)

—続・戦場で本を読む—

並木 せつ子

日本図書館協会による「戦地へ送る本」の募集活動がふるわなかったのは、各県支部での活動や、軍人援護団体をはじめ、他にもこうした活動をする団体が多くあったのも一因だった。徳富猪一郎を会長とした出征将士新聞雑誌慰問会は1939年12月に設立され、1942年5月までに147万8077部、寄付金10万6072円28銭を集めた。木村毅が1937年8月に提唱した「前線文庫」は、文芸家協会が文学者や新聞社、出版社の協力を得て、3か月後には1万2千冊を送った。講談社は、戦地や陸海軍病院へ1937年に5万3千冊、1939年に15万冊の慰問図書・雑誌を送っている。

1937年から1942年頃までの新聞には慰問図書の記事が多い。1940年10月30日『朝日新聞』には「兵隊さんのお年玉」と題して、陸軍恤兵部(兵士慰問の部署)から兵士に25万冊の文庫が送られたという記事。本は岩波文庫から『虞美人草』『大尉の娘』など、改造文庫から『天保赤門党』など、新潮文庫から『平凡』など、春陽堂文庫から『一本刀土俵入』などが選ばれている。

1940年10月4日『読売新聞』には「前線の将兵へ慰問書籍の山」という記事。軍事保護院、婦人会、産業組合などから、合わせて18万冊が陸軍省へ送られた、とある。他にも1942年7月5日「戦線の兵隊さんへ…図書や慰問文」(朝日)、8月8日「前線の勇士へ古雑誌や小説を…」(読売)、10月4日「送らう雑誌類 北に南に兵隊さん待望」(朝日)。1943年11月10日「戦う戦場へ良書 翼賛会乗り出す」(朝日)など。

こうした風潮に、出版社では慰問品として本や雑誌の販売を促そうという動きもあった。1943年10月9日の『読売新聞』に「兵隊さんが喜ぶ慰問袋の心得」として、<若い兵隊さんが一番欲しがるのは肩の凝らない単行本、雑誌、新聞の切抜きグラフ類などです>とあるように、兵士一人ひとりに手渡される慰問袋(手紙とともに生活必需品などが入れられた)の中身には本や雑誌が喜ばれたからである。

また、国民から寄せられた恤兵金により軍が発行した雑誌もあった。海軍の『戦線文庫』、陸軍の『陣中倶楽部』などである。どちらにも、“国民が寄せた熱誠なる恤兵金をもって作製し、戦線の将兵慰安慰撫のため配布するものである”という内容の文言が記されている。『戦線文庫』は海軍省の要請をうけた菊池寛が、文芸春秋社から社員を向出させ設立した興亜日本社により、1938年から1945年まで月1回発行された。『陣中倶楽部』は、陸軍省が講談社に編集委託を要請し、1939年から1944年まで月1回発行された。

この頃は既に物資の乏しい状況にあったが、これらの出版社には用紙の特配があり、約200ページを保ち続けることができた。また、出版物に厳しい規制がかかり始めていたにもかかわらず、慰問雑誌では比較的自由的な編集ができたという。目次には、人気女優のグラビア写真——原節子、高杉早苗、田中絹代など、人気作家の小説——菊池寛、子母澤寛、小島政二郎など、他にエンタツ、アチャコ、柳家金語楼、広沢虎造の名まえも見える。軍が出しているものとは思えないゆるやかさだった。

他に、図書館からは傷病兵のいる病院や、国内の基地への巡回文庫があった。「新潟県中央図書館報第15号」(1938年10月)によれば、図書は陸軍病院の各分院に箱で送られ、一定期間置かれていたことがわかる。病院からの要望として「巡回を継続して」「留置期間を短縮して」「箱の数を増やして」などの声があったと掲載されている。宮崎県立都城図書館では、1945年7月まで特攻隊に巡回文庫を送ったと業務日誌に記載があるという。都城には陸軍の基地があり、7月までこの飛行場から特攻機が出撃していた。

ヒトラーの焚書に限らず、第2次世界大戦で失われた図書の数は計り知れない。日本でも広島をはじめ多くの図書館が焼失した。中国の図書館では、日本に接収されそのまま消失した資料が多数ある。

ベトナム戦争時、権力者の焚書とは反対に、アメ

リカのUSIS（合衆国情報局）図書館が、仏教徒を中心とする反米デモの標的となり焼失した。アメリカが文化工作の一貫として海外に設立した図書館が民衆の抵抗にあったのである。ボスニアヘルツェゴビナでは、サラエボの文化遺産ともいえる図書館が150万冊の本とともに焼失した。文化大革命のときも然り……、こうした例は枚挙に暇がない。

国同士であれ、内戦であれ、争いのあるところでは、命も本もないがしろにされる。こんな理不尽は、戦地に本を送ったくらいで相殺されるものではない。ルーズベルトは“本は武器”と言ったが、“戦争は本の敵”である。

（なみき せつこ：元図書館員）

#### 【参考資料】

『戦争と図書館』（清水正三編 白石書店 1977年）  
／『兵士のアイドル』（押田信子著 旬報社 2016年）  
／『日本の植民地図書館』（加藤一夫他著 社会評論社 2005年）  
／『図書館雑誌』（特集：戦争と図書館資料 1980年8月号）  
／「戦時体制を支えた図書館活動」（村上美代治著『図書館雑誌』1992年8月）  
／「戦時下の図書館」（奥泉和久著『図書館雑誌』1996年8月）  
／「ベトナム戦争とアメリカの図書館」（『図書館雑誌』1983年8月）  
／「慰問雑誌にみる戦場の読書空間」（中野綾子著『出版研究』45号 2014年）  
／「『戦線文庫』について」（橋本健午著『日本出版史料』8号 2003年5月）